和解文鑑　二

へ 5
4458
2

本朝文鑑第二

賦類

硯賦　既望賦　涼賦　惜春賦

讀惜春賦　日和山賦　悠然賦　好色賦

行類

水波行　万歳行

吟類

雨夜吟

曲類

都曲　田舎曲　東曲　舞子曲

門 へ 5
4458
巻 2

昭和九年九月二八日
購求

賦類

硯賦

北季吟

物とりてあらそひてその志と失ふハ悲しき人のいやしか
ならしはれも文房のともかよふなれハやさしきよしも
あつへきてあつまりのよれあけさくら学は流る春の枕
そしやまもその静なる和に合ふかしとうちつくるも
いとこの　しかもあかりや恨これの洗れくあるかとも見い
まそるあまて中みつるあし何しふくみむとひとし人
あれなるひとも見へあまし　五月の此の手向のる
硯のうをふとかされて物さけむし　のむさむの亭ら又撰

の中ともうけしてむかしをひくものなとあらハハ人の世の
ほとのかりそきうなな雲とあつむる雲のふところもりと
なさく深ふ机あし吟さる今またりいれて諸ふ
さへくもあくなえ安心ても起されてハ使ふやくなる殊
なのちくつくもなつかれてをむろくあやふく流るかく吹もれ
うそく物見の友そそあつてあつかわへきしかくておそこみつる愚
のなくらえ我おしまつさよそて陽しくとえハいらし
なりしまれなる世よ出ちさへ為へてのへあつてかつらその
みもあひなるへされのそくしあまくてなくゆまねてへんを
すいせそもひく人然あるといふハ洒て然とうちそると

ことゝこゝろも春はかなし月とて人はくるしよ
ひとかはちりやさし白鳥の風景をもてあそべば行ても
秋なるべし其風の道遥なるにいふをもおかし
うらしけれは秋あはむかしあはれて誰と其文あるは
かなしむべしいやよ世に石も人もさしはかしもとよ

評云此賦ハ文章ノ趣意ヲ尽シテ始ニハ子西カ壽夭ヨリ此
ハ萬雪ノ文字ヲ云イ終ハ石上人ノ二字ヲ云イテ全篇
硯ノ二字ヲ顕ハサス此篇ヲ隠見ノ格ニシテ倭文ニ一体ノ
奇絶ト称スヘシ然ルニ壁ノ中ヲモト云ヘル前後ノ通續ヲ辨ヘ
人但シ源氏ニ玉鬘ノ巻ヲ云ヘルニヤ知ラス是レハ此庵ハ北村氏
ニシテ其世ニ季ノ字ノ名ヲ称シテ始ハ洛ノ新玉津嶋ニ住シ後ハ
又禄ヲ得テ武城ニ官仕ス歌書ノ秘抄モ数多アリトゾ

既望ノ賦

芭蕉庵

望月の残興なほやまず今宵も二三子いさ
なはれて舟をかたゝの浦にはせて其日申の時ばかり
のあたりなりけん何某成秀といふ人の家のうしろに
て醉翁狂客月にうかれて来れりとあらゝに舟の
中より声々によばふあるじもおもひかけずおどろき
よろこびて簾をまきちりをはらふ園に

草ありけるをありて野飼の御月見しけるに頼政
やその岸上に楼をたてかへ近との見をとむれいさ春
の景と併せて月を中川にわたしもふくけて湖上
てふやうに照りそれり華さきね仲秋の月のかた
月のほど見まじくまれけるしかもふと鏡山といふに
今宵はきをはのあふら遠からぬとかめ堂上欄干に
ちれい江上水茎をたちてきこえてはゆき十二峰
のあれとひさしてとかくうふれし月いこの草ふして
思ひのうちうかくれそれいつとも袖上にてふかすと
ころにてけれしあらし此奥とみへて秋くまのから

こゝろし客とりてなすらん湖上にはなるやそこ此月
のかげをうつして水面に玉塔の影をくだきて
あまたより孤帆の光とはふ浦やいさよひのそら
と世の中よりはなれて月の前にひそかにまたと
うち雅言つの歎息の詞なりと訴へこゝろひしも
けしきにあらひて二ちらひ恵心僧都の衣のすそ
せ常寂光の浄土なりけりやといふにあまりにおくまふかし
て来れる客ともにしばらく奥に入りてなさしむやとの
岸上に来るとあくれば月を横川にかくるまで琉璃
塔の影もなかりけるへし

狂云此賦ハ誠ニ劉亮ニシテ全ク賦ノ体ヲ尽セリト云ハンカ去レバ
鏡山ノ一節ヨリ古今ニハ月ノ雲ヲ嘉セテ此ニ其ノ夜ノ章
主振ヲ云テ古詩ニハ玉縄ノ喩ヘヲ借テ千躰仏ノ光ヲ添フ
是モ故事古語ノ用イ所ハ此筆ノ播揉ニ知ルヘキナリ本ヨリ
先翁ノ文章ハ獅子菴ノ遺稿ニモ数多ナレバ或ハ湖東
ノ三文選ニ入リ或ハ門下ノ俳文集ニ出テ今ヤ再選スルニ
且ハ又蹟書ノ両篇ヲ見尽セストモ此一篇ノ趣意ヲ見テ此一篇
ノ虚実ヲ知ラハ和平ノ道云モ更ニ明カニ俳諧ノ鏡趣モ
更ニ明ナランカ去ルハ黄鳥ノ詞ニ入カリテ歓楽ノ中ノ哀情
ヲモ忘レサルハ例ニ楽シテ淫セストヤ斯云翁ニ於テ斯文アランカ

涼賦

渡五吾仲

洛陽の東に川ありて上をかも川といひ下を白川
といふ京わらへは加茂川や鴨の加茂川と云四条に
されば年ごとの六月七日より十八日の夜まては四条
の橋のこなたより三条の橋をかぎりとして此の川
原に床をならへ扇をまくれの扇はなまめかしきをそひ
ひとりのむしろは青柳の簾と隔つ中にして雨月
とむかへのわらはめしてにしの夜の風流をあつめて
なよ竹のうちわ涼しやこらへの涼み人をかけ

詠るの書も風よりおこれバそ一寸八地の心へあらはるれ
依て東西の岸にのぞみてかのやかたくの桃灯をともし
をよびて石もとめつゝちから山端そ久は迄あふ
れ雲液自然のそなへも空と一方ならぬ分れは流れる
扇居より此所まで一帆も柳行の流しおもかげの
やうらの雨川も白眼りしは花の色にまかせりむ流るゝ
やがて花の松と渓られて春暮をそゝる心ゝ祇園のあたり
まして万燈のひかりに白日とあざむき流香火底の
炎抜とて中つ風しきりしいもなうしの音咲ほこる
いかなる事此面白きかなむ宴の鄙び・婦のあそびまく

爰に詠めるとも見わたし侍りて東くの河原に於りて
餅あり酒あり茶ありてあそび採(カハヤタイ)は娘の旗たて
みんなと云ふ坂の比叡にまかるひとも石花菜(トコロテン)の流れは
侍りし八十杯の新内によなよなかなたこなたへもあるをゆかり
比売はふかしとよばれて味も去方仰ぎ花の色覚まさまよふを流し
辻諷は新内の放下師わりに売る女子の女中をあらしめ
夜市の花にも流人とまでま中しむある水嚢投(サケ)
猿猴のまとめしあるは滅多肉又王蘇(アレイ)死国を
抱きく辻に軍林の恵と侍へ梯子紀倉の并し手筆と
こくは歌かゝらの地獄犯人も恐れる一様に善悪と

見られし一刻よ人生のあはれの雪よ中よ物ハつゞれにし
むかしを今のまゝにして標(ひやうき)よ此卯の好をもりあらん
名利の向まくを思ふりやも尾の花ひよ右とられ
まろや花れと乳よのさよの才よもかるゝ趣邉よ
あくしれむ是市儒の花もやむかれハ言は郎の
おもらの者よまゝをてとかくもさもりもれあるも知るへし

狂歌世路ハ縦横無碍ニシテ始ハ王城ノ万代ヲ祝シ中ニハ
吾妻京ノ花美ヲ襲ハシテ終リニ遊人ノ哀楽ヲ云ヘル誠ニ長安ノ
名利ヲ観シテ然モ長安ノ名利ニ遊ヘリ或ハ四時ノ風景
ニ和スノ文法ヲ交ヘタル或ハ宗匠ノ桃灯ニ浮世草紙ノ

筆格ヲ用イタル或ハ河原ノ生実物ニ長短ノ對ノ賦体ヲ尽
セル總テハ俳諧ノ筆格ヨリ新古ノ風ヲ呑成セリト云ヘシ
況ヤ儒仏ノ高論ヲ牽ケテ其ハ中ニ俗語ノ軽忽ナル窟
文章ノ霊曲ヲ傳ヘニテ洛陽ニ無作者アリト称スヘシ但シ
世郎ハ渡部氏ニノ別荘ヲ柳縫園ト云フ高キ人ハ標号リトソ

将棊賦

東花坊

象戯ハ壺觴のあそひを表して勝負ハえぬ芸
とてふむより張陣の法ありて盤上よ智恵とせく
かうしむ國よれ王の仁あくまゝ忠臣の義あらん

や勝負ハ此の運によりて上手と下手との位至
なくしなく馬組の法も是ハ左から右かとひ
將木傍櫓をして金銀桂香と八方よりけて飛車
と角行とハ軍師の位なり一しむりを漢に張良
あり蜀に孔明あるごときぞ諸軍をさして一つ枚の
下知によりてふまいまでもすめなし依れハ銀将以下の
諸卒は皆敵の城中に深く入る時ハ王と一所と
なりて金将の位となりこれを將棊の勧賞して
なり此故に步卒ハ楯の羽となりて支よくもしなく
諸將をさゝへ依て敵陣と対敵するに飛車にかく香車

とかくハ角行をもつて桂馬と依て此二騎を縦か調練
によれてもの旗下の勇士と云一つ依て飛車を
居る飛車ありて角飛車あり中飛車ハ右法の軍
立なれハ中央に銀角のなきしはめてもしむ二方に
一兵の旗あり兵書に云ゝ逸労の法ありてそのなき
なくハ此の歩と依りとなり或ハ中ハ段ハ飛車
のある時もここに歩おそれをなゐるとこての軍地
血気よりも桂ハ角に依れと醜卒すにやしもきれハ銀
桂に香と依てぞられてゆるんとするを度とこそ
られと云々ハ輔と云々て敵ハ楯の羽と和て

然ハ一味二万ハ大将と討れし馬の足立のそてらかなり
ふるさとの敗軍となりにけりとや又鶴のかうハ龍
巣のまゝにたちのきしに其ら五ヶ書の誠も定かならず
帰てあれ敵はげに深入て王のかくれしとおもひけるに
かゝらう桂馬とくれなゐの銀とかけ胡簶(やなくひ)にたゝ
金とうちはて桂香の陣に責よせけれハ鉄砲足軽士
も旬をくしてハ右南をくし其と龍王の一手押しついて
元帥のかなの軍ハ術ありけれともかの子北香車は陣取
まで法りきまりてたゞし通されてあへなく命を失ふ
されバまろてハ此名ハ将の首にかゝりてかの討死にも陣有

それぞれきかしるゑん陣ぞかこそ一家ハ咸陽ハ歌陽なりて
定まりて敵をとりてハあるまじけれのいひやけて角れバ
かの懐ニひそみてよ星のかの勝を定かにされの時より
うたかひて其ら馬陣に香車をまつ勇をとかくしおもひ
ハ金銀とり陣に元帥のまもりに命をかけ給ひて既ね
の勇気とともふたりかの沖達も遠く押なされけれハ
東方元帥王に諫さとやかてかれかの桐にしたがひける河
かくて敵兵そのなをとはんとして王将の花をかへの先と
はさみ銀とあくり桂をとられハとらへつゝ鶴翠香の
遠角とりてうひしに其王に元帥にとかきて

ゆしよの勝をわるすハ全く角のやふの秘法なりして
子飛をもちて一生よまもなくてよくしたらハ軍のなかにハ
また勝よ斧なりとらあやゆしちなうとやその比二十三書の
口辞にも王手飛車手よかでれ角判し謙ひこれハ
自然の手余地のいとなんりし連音絶読の妄論
よおまへへるハかかる陣中の風流りして濱梅足の跡ハ
ふまるれなしハ結りをあるはにて陣中よおこの苑ひろ
ていろよ角行ともそるるの心法よ細さんハ降の軍師
よえるをとうしやしよやそて官名のは龍馬やし
ふのりて中方八面よ威風とゆるよも人のおそれ

角なは又角ゆくといふとも打のあしにて金将ハ
王将とそれまて常によの中にしてよりて諸軍
の貴賤とりてきるりゆの也すまし飛角成ふをまき
かしむるあれハ銀将のそまかにね陣とりてゆれとも
ひとより官をもく禄おやまされハこつし但討の勝負
ところにて玉をあるし銀将の下知をとるしてやれしと
いふらちよおやくハ桂馬将の本手とやすかれする
よ一寸も飛にすあのりてと或そ桂馬よおひられて中段よ
まよひゆくうよ斧に昔の馬するもてられたるはハかちこゑの
歩をそよるふられてもるる敵の手よりくるそれまて

よのつねの兵を耀してその身をかくさんとなるなれや
さるによつて録将をやぶるとしたがひ常に大陣のうへ
とかゝやきあつかれ信を将とし神にあらしめ
虎をかうむることありて敵とねたまれ和睦をなし軍
兵の末にとゞまりておはなれむし朝夷なる
首引も濡王田と親みも虎の爪にも及ざらん
ほそゝまた其重臣小股をくゞりつれどもいとし
とほくへだゝりよそに狸むてなみだをながし
ゆるを韓信がやまとくらくとゝりて大将のなをあをと
あらはれ共にこそと語るも足軽の法としひて

飛将がたふの軍略あればこそ古嚢砂のたゝかひにも名
のこりけるにや偏なるにそれを敵王にむかひ合戦
何ごとによらず敵をその腹をとつてまさる也
るはその牧一所にあつまり金将一枚にも及ざる
弱くも官位のひくければとて今はその身のなんともいかゞ
心得られしとおもふに金将の心をもつてはし時は
といはるゝあるべし言を猿馬の如しとおもひしむる者なれ
そしむはれ其の隆もかなはで危をかへりみてまさりてく
まあつてもうけるが猶の勇気を似て息のこゝろかけは
はなはだしくいひし張儀も楚秦のやうな雑説もなし

りて敵国をとらん物のひまを窺ひて不意を討んと
すてこれらを仁智の作法とおもはれてそのかれそれは飛
とふ作もあるは王将の親軍又高塀と離れしと
さし飛車もと銀将をひきつけ歩兵を乗又はしやうて
桂の鼻をとおさめてそれはてんかし二筋はとおひ
ふかくは悔をとるまじくかりそとは桂馬のなるあるあり
とひて世智にかしこくよくをとふもちれしと桂馬のはら
詰とひ又は桂馬のてふし詰とてふは何かの重の
よりて敵の油断と京詰へは又うては飛車の軍と
このそのすくなり香車を角銀の小姓立なるはる

すゆるてふさ海をなんめり此方の軍又一よ橋して
まの面目ともしらむとえる我めりてもあひ一筋はあり
かれて素鑓（スヤリ）を銀の家の一法あるてしまると一陣よ
もかむ時歩兵の筭用をさらえてひしと鏤気を
みようれとれはこちてもひえてなてへうるさし物とと
けれは悔を残きまのつくりとふて一しかくて両陣
両王又對して始をとき（キンフ）の一行よちりさてむかう先
あれはきらさくうちきえあらて中にそ二行よ遠立よ
遠をとあらそひ孫を一行よ遠又勝負を決るて皆
先進先退の兵法よりて上にはとぬれんおくてやる

ユやはしる河に月みんしもて詠むる所も取合のおもねと
なりて命を取るとも取らるとそ其の損ねとをしるには
あられて居るものは是をはかりて是のみと説れくして
諸葛武侯は八陣圖をもうけて神機妙算の謀と
ぬくもし宗桂の家には将棊経とかいふ戦攻
将の法とありて畢竟は油断も敵のやぶれ
儒師危をも説ひらきて四すくみの手段もあり
八十一目の将棊とも云れは孔子も金銀をとゝめ
象戯て作をとしても須へ浮沈や盤上のあはひ
とんてみるの効のきは勝をもとへるへしみるの勝利

鈍ともいふ一くれいはいかにくの色しれ印とえらひて
人々に對盤の法とをまなぶへしや

讀二将棊賦一ヲ

村野航

將棊に一軸の巻物あり開れは万里の天にひろかり
竜王の髭(ヒゲ)に乗り龍をおこり隠れは一尺の盤上におさまりて
龍馬の騎(ヒヅメ)に風をきりし津に縦横自在なる津に歩更
物しらぬ金もたかすの金と銀とを卸して和漢の情と
役しなる也これを桂馬は亀鶴を蝸牛の角に因と
あらそひてからくは敵となり味方となるもの大将お

剛愎なれは偃蹇の軍となりし軍師の仁勇なれは章邯の
詔をうけてさらは戦国のならひなりともかなしきかな下
て上をたのしみ又慶軍の方とさきて中庭にもれいあれ
ならきゆの志輔つくし若ハ角りめひくためし鍛ぬくして
やみて漢楚の風流を張良か謠なる一しかも金の將鍛様
に関羽張飛か異見なきもあらきて武綱公平か力味ありも
そし金と宗盛の臆病とおもへは雑兵のよに栄耀の
むけちか銀と韓信か勇気とせしよりこれは諸卒の頭
に武衛の名とつくしくこれに官禄をたくはへかへるへく
の今もたしめ人ではゆかしさなつかしや捨て林泉に不謀

なくして孫馬を張飛か辨ありて堺と趣くは此駒は
それと軍によりて林泉を此跡の名言なりとん或ハ兔逸ス死
ぬへきさ以テ逸ヲ待ツ労ヲを兵書なる人の退る處とする
にお葉の戯言にのりなしえ或ハ前行の習軍なり
さ古襄砂の二字には文章とまつめさゝ或は秋とよつれて
男のなれとかうら人とあさむきて寓の傳ふへしとえれ
うたきを食てて今は此世情と写して儒乃の四書と
もによろり佛家の八教と指にひふるそ術只將棊に
此喩ありて和漢の情とこそつらしまうす人のて此盤上の
あらそひとつくして人は夫婦とも忘るゝことさらに堯帝は棋は

えそれとくらしへれまん世の人に見えひとをそよしくれとけるも全啟
れ刻膣の人を勝山よ出来と思ひされにやりて又紀行
般這の旗ふと貝るゝ急作と申けんやけさしね集
ま治府とふくけもね葉をきくしるゝ吉ほとゆくふ
うまて世をつさ書之写つけしかまん名人號の咒ゆくて
駒よやすねの情とおもれハ卿よ五よ巻の粋とけて
とらう遠く大般若の真経と申らつねんきり近く小将葉
の此蹟とこうむ画し
任云此ハ扁ハ前號ノ註ナヤラ委ク啟良古語ヲ解スルニ
文ニハ句對アリ意對アリテ與ニ對体ヲ昏成セリ訣・

應用自在ト云ヘし云ルハ荊公ガ傳類ヨリ云フニモ譜ハ一字
ヲ題セリ然レハ此ノ扁ノ趣ハ始ニ巻ヲ節ノ二字ヲ以テ和漢ニ
万般ノ情ヲ喩ヘ儒仏ニ一貫ノ理ヲ達シ二或ハ雲起リ風
輕レトハ孟父ガ卧竜ノ於ヲ搞シ杜陵カ胡馬ノ詩ヲ猿レリ
或ハ保元章武トハ和ニ信頼ノ敗軍ヲ云イ漢ニ孔明ガ出
師ヲ云ヘル但シ先帝崩御ノ年号ナラン或ハ関羽ノ一對ニ六
和漢ニ智勇ノ兵士ヲ云イナビヲ思ヲ見トカ時トハ互見ノ法
ニシテ何モ显署ヲニ異タルナリ増シテ宗盛四ニ韓信トハ
金銀ノ情ヲ表シテ文章ノ風情ハ言ニ知ルヘし或ハ差ル
ノ一對ニ甚レヲ敵ヘトハ其名ヲ云イテ是ヲ鳥トハ将其ヲ云

ルモ隠見ノ法ナカラ甚シ是レノ二字ニ云ク中ナヘテ此等ハ奇
絶ト称スヘシ然ルニ浩誹ノ大般若ハ十将集中将某ト云フ
ヨリ摩訶大ノ乙字ニ縁音ヲトルル此等ハ当意即妙トモ云
ハン但シ野航ハ加々美氏ナルヤ別姓ハ村瀬ニシテ濃ノ山県ニ
住ス蓮二房ト従弟ナリ

日和山賦　　山岸昨宸

湊より日和山とよふところや停て風雨の変をみて眼界
ひろかりけんとそ也されハ此湊の日和山ハおのつから圓川を
帯としねより五百田を襟として蒼海をよ伊のほ

ちゝめて白雲一万里の遠きをとゝろかすされハ遠山のかさら
ありて海にあらそへし海にあそひ一林麓に松の風のる
より市店の白壁にゆかりて南に金風寺の閑静(カイチン)
の磐石をひらし北に月窓寺に入道の鏡ときく面そ
の景を添へし海岸の観音も多きの様すむを見るにあやて
松故に江東の行もあらひや一しはしやまた北にさしかゝ
西南に添ひくるかあり白根の雲に一段におもしろき新羅(シラキ)
の月ハ千里にさそひむすひて眼界のおもしろさあり
むかし蒼海ハ此ころにあそひて鵯(ヒヨドリ)の中和を手にさとえ
此のち漂荒子にもうちとおきて鵙(モズ)の松風と秋をふきて

近くは海に作くり出せよと漁人山を風雅の人とやいはむ
いさらある時は入江の夕日にあらはれ朝日にあらはれの
島嵐に隠れ岩山に凱湯の名はあらはなし浜に来賦の
俵とかさねたかつかの港のまつりに流るふなとその
の月のゆるかおもしろし或河の海膽も越浦の鮑鰈も
長く続く蟹は上子の月と知らるし島屋の鮭は下ニ鵑
のにまして泥はせし灌頂寺の稲の黄の車北ゑにあり
加はる酒の雑天と今の世北福とあまさぬ鍛冶のふし
将するの傍らに雄鳩は許しのよしてや行ひて船に乗り
い秋田の日和とつのり笠にすよくは松鴻の風あやこ

去年して市倉の降し潮に夕陽を見おくれば三里浜の
煙は須ニの浦まで紙かさひて風見さうにあはれくさて
されと我津の遊女ども此胡蝶の香とをくらね男子庵の
笛にまして聊りしは世中にあれかさにあかおねの人とうん
おくりて佗起難ら酒とものひ入江ねの宮を詣うりて
三河酒の音にあくさむ詠ぬまるん川山にまねきたる西
の情あるにくよ作るをまくさあく時とあく売りて
おもしろのとうり早嘆息とされて特に毛禮の
遊ぶと行くとに扇子菜類の風情とはせて居らしり
三千の他とあるやいて世上の風姿もそれらしの人と

いそくとおもるあらんはかれと般ゐのこゝろとして言は風雨
の書池とえるひ春秋のはれとはなむへくは天地と
人の和はさるとともとなるて賢人の論もいろいろさやと
変るは和らの賦はくるてはくかくなとはくさるめるへし

任云。此篇ハ全ク賦体ニシテ其文法殊ニ遠キナリ。始ハ王勃カ帯襟
ノ二字ヨリ金風月窓ノ閑寂ナル白根ニ新羅ノ一対ハ筆下ニ
天地ヲ縮ムト云ヘシ。或ハ山海ノ名物ヲ賦シテ上戸ニ下戸ニ聴ハ句格
ノ自在ニシテ棍トリ二言ヨリ三ハ文法ノ風流ナラン。或ハ芭蕉ノ一段
ニ胡蝶ニ思フ席ハ言可結ニ彼夜姫ニ衣通姫ハ時ヲ得タリト称
スヘシ。然ルニ朝雲暮雨ノ四字ハ宋玉カ賦ノ神女ヲ借テ雲雨

ハ山ノ言ヒナルヲ長恨云ノ情ヲ合セタル。誠ニ博達自在ト
云ヘシ。去ルヲ江ノ此ト話ノ嘆息ニ寄セテ妾ニ一篇ノ骨節ト
成セル本朝文粋ノ三序ノ類ニ見合スヘシ。総テ此賦ノ趣ハ山ハ風雅
ノ人ヲ待ツト云ヨリ北山ノ移文ノ山霊ニ寄セテ北山ノ風雲ヲ慕ヒ懐ヲ
ト云ヘル鍾山ノ英霊モ巫山ノ神女モ共ニ文章ノ起結ニシテ
一篇ノ首尾ヲ見ルヘシ。但シ作者ハ越ノ国ニ住ス。山家名所ノ風土ナラ

悠然賦

蘆乙子

雪のおもしろさにねふりてやそれ眠さるは世君庵にあつまりて
例のあたらしみよあり菜をとむしよりて洗く人あれは

隣をむすふ程はあら京の此あるじを人とあがめて
呼よせし悠然くらのと記は此はんにありてはなれんや
柴の戸には弁の末まで加えてたゝ其弁には人の声もなき
こゝにやすらふ記は此処をとなるはしんや此君は其弁
といひその人とふみには千草なる人とよびてもてる
あるにぞ隣を人とはかたてるあつかひてしけなる庵に
とまりとはあはれみかのゆかりてかくる悠然の隣に
も宿ねは是を隣ありて草あふんにや記は此処よ
あはれは隠んといふはた京此あるじを人とまねらせて
呼よせし悠然くらのと

紀云此賦ハ四五語格ニシテ然モ文賦ノ劉亮ガ冬ヨリ去ルハ己固ノ悠然ヨリ或ハ三字ノ酒茶ヲ用イ或ハ八字ノ其既ヲ用テ總テ其詞ヲ畳(カサヌ)ル二三子モ其調ヲ用ヲ妨(サマタ)ケス此等ハ漢文ノ尽サル所ニシテ実ニ和文ノ風格ヲ知ルヘシ但シ此君庵ハ賀ノ金城ニ在リテノ駒百子ノ弁ト在リモ水竹ノ幽居ニテ然ルニ此名ヲ種テ子ト八樹ニ枝帥ノ隠号ナカラ集(ツド)ニ在子ヲ讀メル時ノ門題トソ

好色賦

兼好法師

万よいみしくとも色このまさらん男はいとさうさうしく
玉の巵の底なきこゝちそすへきと

まなこくれておほさやさまてやまとひありとて親のいふまゝ世の
そしてもと行にむさぼりのはてはふくあさきさるてよ
おひころれさるをおそらく棗くらつよやまとくむねるなく
これをおかしきれさうまそひくさそしきまゝかれうかく
まなあしくて女の文字をもてしはちくれくこれあしかよ利し
うる色よふこの行なれ

釈云此篇ハ世ニ知レル徒然艸ノ之段同ナリ然ルヲ宋玉カ賦
ニ效イテ今ノ之ヲ擬スルニ其趣ハ異ナレトモ其意ハ同キ
ナリ故モ此段ハ其一書ノ関門ニテ古今ノ物者モ多シ亦七顛
八倒スト云ルハ学文者ノ細目ニテ色ハ好ムヘキ経書之覚ヘニテ

色ヲ好ムモノハ道理ヲ知ラズ婬シテ好ム子ヲ解スヤト徒然艸ニ謂
ニモ此論アリ誠ヤ好ム子ヲ擇ム子トスルハ歴言ヘシナリノ宮女ヲ
擇（エラブ）トモ姿モ情モ世ニ勝レ一生添ヘトモ飽ストイフ天下無
双ノ美人ハナキ故ニ無二好ハ独寝ノ二子ヲ求メテ異ニ見ルハ
無二妻ノ道理ヲ云ヘリ此故ニ登徒大夫ハ齗唇（ケツシン）ノ女ヲ愛シ
五人ノ子ヲ生ス宋玉ハ靨輔（エクボ）ノ婦ヲ擇（エラ）ミテ独寝ノ男ナルハ
無二好ノ云ヘル好色ニテ宋玉カ云ヘル好色ハ異ナレトモ
意ハ同シト註セルナリ疑モナク無二好ハ文選ニ此賦ヲ出セル
ナラン誠ニ此段ノ異ニ見ルヲ知ラバ二百余段ノ才ニ至ル物徒然
ノ文意モ明カニ無二好ノ一生モ明カニ儒仏ノ両教モ明ナルヘシ

行類

氷波行　并序　　山岸非右囊

三国の北一里ばかり大淳山の麓に海曲あり。その所を
東尋坊といふ。世に伝ふ。此坊は天台山の比叡の衆として
宝の一なり。宗旨雲遊なりし時真性にて異僧恩
にその師とあらそひ、其の徒とかたらひて草庵を海の窟と
業とよりて師彼を恐れとらへとてひそかに
ころさむとすとはかりけれ、ある日宴の席に酔いて
人とともにしめて岸より突き落しければ
そのれは彼の怨霊に此海曲にこもりてよくの月

五月には風あらく波そちて西は小湊の方より滝坊
の雲といひては人の恐れをなし波は此渕に数石
およそてよ信の井手と称くまことに岩窟の曲ぐ
うつまそて人知ろきに脚の醸きこころもおぼえて
此の時なりんかなへし和尚の魂とにくみて此渕を
なそめ隠ひし、波の風にいふもおもしやとぞ
ある人詩客の風流もなひて郷宗の風雅にあそふ
可しやし此一篇を諸君とおなじく
むし侍ありまえにまゐりて　卯月の比ひとりん
一室の風にいれてもり吹て　宿まみだれ沖やとらへん

鎗の鞘の鳴るまでかくれて　鉄の音はいつくしきさうん
海老の尾はけもつるみ行て　鱧の頭をくさくとるもしん
水よりよくへいれて湖あれて　はなとられてれもなしん
今うれしき胸のゆるされて　山折くお次っ川ちりしん

評云此行八十二句ニシテ詩六之韻一偏ノ格ナカラ總テウクスヘ
一韻ニ六句ノテノ方ヨリ六句ノムクチヲ用ユ是ニハ一韻一句ノ格ト
云ヘテ倭文ニ一体ノ鑑ナラン況ヤ此行ノ俳諧ニシテ卯花ノ雲
ニ吐鳥ノ古キヲ素セ是ニ文章ヲ顕タル本ヨリ蜀魄ノ名ヲ
以テノ悲心魂ノ二ヲ子ヲ云ヘルラヤ然レハ此行ハ水波ノ二子ニ達乾坤故
ノ陽アレハ是ニ此行ノ名トハナセリ誠ニ禅門ノ語脈アリテ這ケ
ノ法語ヲ轉却セリト云ヘシ

万歳行　五七言

華表人

「同音齊
扨君よ五万歳てよ作へ先々よきみる尾のよし
あし寅の大和あるよ君も作る日入て海より三。黒ろよあされい
家は末ろよ民よあひあひて志るあひとう世よあるよ波も
たちわらやしやの関をうる花あし△翁ふとしき万歳
まさきしうれそろかもるて。「猿君詞 壺よ相くるさねよ志ふし
「同音の部
壽徳めけよの遊のさしむしのうれよあよいかり海ろひかり
のめちよ△「猿君詞 翁手もさうし川祝よいて「同音節 万歳来の服はしき中比

こハ「俵君詞あら〳〵ハ。「同音節柄もかへりまいりてそや。あやくれおろそかに
ゆかと思よるこしてぞやされハ。今の京をまはりに△
菓柄くここくきり△「太夫詞柄の風俗し「俵君詞餅の砂糖「同音節ありかくさ
ろきる法にめかり。△「同音詞実まは神おをおきはる千歳楽の舎
と姫よ「君代まや「俵君詞無事はまて「太夫詞喜びをまへりより「同音節われまをゑ。おね
作ても年のはじめの豆よりも柄からくり△「俵君詞たかあらし
「太夫詞それもひさびさり「同音節民のかまにぎやかやしまれ△

狂云此行ハ全篇八章ニテ章毎ニ八句ナルヲ八句ニ之新アル古人ハ前ハ
ヲモ四句ニ韻ニテ後ノ四句ニハ一韻アリ例ニ首尾ノ韻法ニノ本ヨリ
換韻ノ一体ナリ去ルヲ才七章ニハ九句アレ尾君不見トハ樂府ノ

常語ニシテ唐行ノ類ノ発語ナレハ和云ノ韻法ニモ互文ニ字ヲ
除クニテ知ルヘシむもおも二才五章ニモ語路ノ拍子ノ違イ
タルハ杜甫カ麗人行ナト李白カ襄陽ノ歌ニモ此長短ノ
句拍子アリテ是ヲ変文声ノ曲節ト云ヘリ此故ニ此行ニモ短語
ノ変文声ヲ詞トナセリ然レハ此行ニシテウキ言リテ節ト詞トノ差別
アル文ニ急緩ノ拍子ヲ知レトナリ但シ初ニ凡々ヨリ君見スヤト
云ヘアタリハ両人左右ニ開キ合セテ此曲ヲ万歳ノ大夫ト云ヘリ
ヲモ親ト類トヲ見合スル時ノ形容ナラン總テハ漢文ノ倉語ニ效セテ
但シ万歳ト云イ治所ニ万歳トニヘル此等ハ千鳥万歳ト云ハン
或ハ尻当尾ノ詞ヨリ永ノ千子ヲ云イ含メテ大和ニ君カ八千代ヲ

祝シ或ハ鳴ニ照ノ字ハ照鳴ノ倒将ナリ或ハ逢坂ニ鷽鳥ハ鶏ノ
虚言ヲ含セテウヤムヤノ関ハ憂字ノ縁ナリ或ハ樫鳥ニハ
西行ノ哥ヲ借リ華袍ニハ東坡カ詩ヲ寓セテ例ニ和漢ノ通用
ナリ去レハ東坡カ布穀ノ詩ニ勧我脱布袴トハ其鳥ノ鳴音
ナレハ爰ニハ素袍トモイヒタルナリ或ハ三京ノ名ヲ云ヘハ御所
万歳ノ詞ニシテ雉坡曲トハ酒ノ名ナリ然レハ西王母カ四字ノ内語ニ
提壺蘆沽美酒ト啼ク鳥ハ日本ニ栩栩ノ鶉ナラン啼ナヘニトハ
和哥ノ詞ニ寓セテ鳥ノ俗語ヲ験タル爰ニ天章ノ二匠ニ寓ス
又ルヘシ或ハ閉扇ニ柄トツケ面子鳥ハ雌物ノ扱ナニテ濱千鳥
ノ既カクナリ総テ万歳ノ詞ニハ千年トツメルトノ二用ナク或ハ京

タイラケハ平安城ノ二字ヲ云イテ菊桐ハ当時ノ御紋ハラ示ノ
叢郡ノ異言ニ效イテ爰ニモ聖云ヘルナリ或ハ我朝ノ松ニ鶴トハ
平ノ一字ニハ洛陽ヲ祝シ松ノ一字ニハ武城ヲ祝シテ尤モ千歳ノ
カケナリ或ハ千年ノ御祝トハ諸ノ万歳ノ結語ニタヤラタクレトハ鶏モ
收メヌルヲ今ハ三市ノ御制度ニ寓セテノ家々ノ庭竈ヲ祝イタル誠ニ
目出度キ万歳行ナルヘシ但シ鶏養人ハ我師ノ隠名ナトヲ更ニ奇怪
ヲ慎テ爰ニハ丁寧カ鳥ヲ云ヘルナラン

観

雨夜吟　　沾芦文

むかしおもへはなれぬとしれて　田ごとの袖をぬらしてはてそねかし

詠もせてかのむくぶ子に　桂にてありたる言葉からし　○

秋を持ちてしに食ふかね　世とも早く出のも名ふまぬる　△

衣食ぬるは川へあるよ中よるとて　人とうやむんなゐるん　△

住ハや居もあれはてろうる　荒かねるあまり濡るれ　とて　○

伊勢もかふる閑ねかふ食て　忘れかてゝられ浮世あらしと　○

まちかまち西のあとし冷ふけ　濡るゝて秋のくね雨ふかむ　△

寒ケ竹林の立ひあとぞろけ　すまふあるかふ人にうせんひとつ　△

住てしみのむれちりまくゝはて　やよ住ふれのあすも濡るれ　○

なしてえ見のありくてし住に　桶もそゝるものそりあくはて　○

秋に秋とて雁うしの実れ　なれぞあしねる根はねぞれな　△

秋の露ことしく人やさてうちむ　雪の海ふくのさゝらあ濡れて　△

住れし間ゑのいくかしね　雪は無事にて人もをゝし　○

住さきぬ日のさしよかるれは　なからまてねなりも見もそん　○

ふそやひ見れ世と持て住く　樹下石上を詠みてくるむ　△

やしてしせとれの不浄よ　霜うたりてれぬれれてやある　△

秋に月おもきとて不断に　雨降りし起りし不破の関ある　○

雪は物ともしてありかゝらん　むつむの相れ濡るをかたる　○

評云此詩ハ九言八句ニシテ毎句ニ四句換韻ナリ是ハ杜陵カ

破屋ノ歌ヨリ衣食住ノ三ツノ中ニ住居ニ四季ノ景雑ヲ云ヘリ

然レハ春秋ノ二字ヲ以テ一首ノ二句ヲ互照セしむる四季ニ躰

ヲ分ケテ春秋ノ詞ヲ累ヌル所等ハ偶句ノ立意對ニシテ意ニ無ニ論ノ奇法ヲ作スヘシ但シ章ヤ屋ニ意ヲ讀メル古人ノ證モヲ尋テ誠ニ吟ノ一体ハ蛍ノ書ニ喩ヘテ自己ノ沈思ヲ言ナレハ杜陵ハ我子ノ憶靈シキヲ歎キ昔人ハ我子ノ行末ヲ思ヘル肉守ハ起聯ノ每ニ之喩ナルヘシ然ルニ不破ノ月ヲ以テ関ノ二字ナキヲ不審ナロル結語ハ題名ノ落字ナキヲ沉吟ノ情ヲ亡ニ尽シテ鳥玉ノ二字ノ無用ヲ知ランニハ但シ作者ハ佐野氏ニシテ美濃ノ関ニ逝故ヌ實ニ所ハ杳党ナリ

曲題

配曲　二章

作者不知

しやとき有らくめくハくもれとそうてとまさ立

ろくる月を

雲のよやろのあまこちのゆし　かやうあ嬢の

ろうのあし

往云此二三章ハ古キ唱哥ナレハ之ヲ曲ノ文鑑ニ出ロルナラ其ハ前三章ハ古今集ノ實アラテ月ヲ占コソハ文三章ノ花ナルニ後三章ハ新古今ノ花ノミナルト漢ニ牧牧カ詩情アリテ取數ト思ヒやりメルハ此一三章ノ笑言所ニシテ字君居ノ鶴ノ雲体實見ナランカ

田舎曲

作者不知

帝云ふしらま身ろぬうり辭のまろふ陰てあへさ

うぶごゑの杵とつれてそだてし
こゝしみやのあらめかしとあやうらしきはうひは
うられ佐世の子まへてとゝて

徂徠云此二章ハ能登ノ国曲（クニブリ）ニテ總テ之越路ノ前ニ訊謡ス漢ニ
下里巴人ノ類ナラン然レハ楽府ノ古風ニ似テ当年枠ノ風情
ヲ漆ヘ真禪（マヤフシトシ）ニ里巴集ルハナト俚語ノ中ノ風雅ニシテ所見ニ文アリ
トモ云ヘキナリ然ニハ都曲ハ盡ク去ノ法ニシテ田舎曲ハ鏤挫ノ
格ナラン李白カ三五七言ナト並ニ七五ノ拍子ヲ知ルヘシ

東曲（アヅマブリ）

生卿 評

かさやきぶひやらでびやうもさふて盆ぬの二俵ぞ
ちんだゝおふ

徂徠云此曲ハ奥ノ田植音ニシテヘツトハ酢音ヲ云ヘキニハヤトハ不埒ヲ云ル總テ
土言踏皮（タヒ）ノ栄耀ハ儲モアレ二俵ノ年貢カ氣ノ毒トナリ但シ一生仏ハ
東国ノ座頭ニテ此類ノ楽府ヲ謡ヘリト徒然（ツレヅレ）ノ為雑抄ニ於テ云ヘリ

巽子曲

某郷 評

さゝちれの歌のんでてまそさてぬくゝぬの山の山猿も
人よかられてわ袖にてあくが郷へかへりぬそがしおと関の
ねざめの川ながしお拝ていひのあまらで日本へ人かはらも筆の端

やはらかくしきりぬひのたぐひあつまりてりうの西や
そのかんなりとせ人とくまれのの琢はつきてあらぬてかな
拵子めのうらそきてきるや世とあらさる此類の醜なんと
かきしまゝ世をとものへらし流もすきや拵子とさとなてあてをか
山さらぬよらひをおや猿のてらしさふろところにこそけ
桃李よのなとの歌とても拵するなての西本拵はかのらまなるの
ちしよみそて世世とあしてて類のこはれひしくまも坂とさ
猿りと浮うしふん之川也川とハ川そふひものあるつまや
およびなれらの月とあひてあとかくえのされうとま
男と見猿の影ともやらん

祇云此曲ハ此体ニシテ全篇五十八句ナリ去ルハ行末モナキ日ナ賤ノ
者ノ娘ヲ舞子ト云フ者ニヤシワキ至テ大名公家ノ寵愛ヲ
待ツニ如何ニ定ナキ世ノ無益ナラズヤト暫ク其字ヲアダナルヲ
云フニ似テ実ハ其ヲ親ノ情ナク及ハ又虚モノ月ヲ数ムニ哀ヲハ
鏡ノ影ニ泛テ実ハアヤシキ尼トモ成ナン去ルハ前ノ無舞子ラヰヘニ
宮ハ都ノ歴々モ拵子ヲ其業ニ仕立ルニ何某ガ娘ハ其ノ師ヲ一取ソ
テナド指南モサ花ヤカニ舞ヲ雨ヲ勝ニサセタル亭師ノ時世ヲ嘆
息セルナリ去レハ舟コギ日和見ルナド置キテ狂ニ道行ク様モ
綱手ニ渡リナクヲ一テトハ路々ク猿ノ謂依ナルヲ無舞子ヲ執モ踊一
タルナリ或ハ袖ニ世ヲ忍ヘトハ如何ナル公卿家ニモ立帰テ父母ヲ

孝養シ世ヲ髙橋ニ過キヨトナリ或ハ渋モ聞スヤトハ一ハ三郎ノ中ノ
短語ニシテ君見スヤ君聞スヤノ例ニ古樂府ノ吉サ語ナリ然ルニ
我子ヲタキテハ懐抱ノ子ヲ帰ル青嶂ノ後ニト云ル古詩ノ意ヲ
聞スヤト舜ノ子ノアドナキヲ諫メシナリ但シ世ヲ思ヘバ下ハ六文ニ
孫子ノ向ヲ抜キテ例ニ変文言シノ曲ト見ルベシ況ヤ桃李ニ惡木ヲ
對シテ佳肴ノ名臣キニ居ラシヨリ躁栗ノ安キニ眠ランニハト先賢ノ
ノ詞ヲ取合セテ朝ニ暮四ノ世ノ様ヲ云ヘル此等ハ和者ノ文章ヲ
ニ傳ヘテ世ノ栄ニ路ニ教誡ヲ忘レサル誠ニ天地ノ情ヲ勤シ誠ニ
鬼神ヲモ泣シムヘシ

本朝文鑑第三

引類
富士ノ引　手習ノ引
謡類
雨乞ノ謡　石搗ノ謡
辞類
風俗辞　山姥ノ辞　艶詞　戯仰ノ辞
懐ニ搭子ヲ辞　夕暮ノ辞　鳥追ノ辞
箴類
閑居ノ箴　猫恋ノ箴

早稲田大学図書

引類

冨士引　并序

山部赤人

あめつちのわかれし時ゆ神さひてたかくたふとき駿河なる
ふしのたかねをあまのはらふりさけみれはわたる日の
かけもかくろひてる月のひかりもみえす白雲もいゆきはゝかり
ときしくそ雪はふりけるかたりつきいひつきゆかむ
ふしのたかねは

田子の浦ようちいてゝみれは真白にそ
ふしのたかねに雪はふりける

和云引ハ諸体ニ分明ナラス按ニ詩騒ニ似タル物ヲ序引ト并ヘテ註シタルハ引ハ決シテ詩哥ヲ後ニストエヘル題註ノ字義ノ意ナランサレハ故ニ詩人玉屑ニモ始末ヲ載ルヲ引トエテ彼ニハ詩引ト并ヘ註セリ然レハ万葉ノ題名ニモ山部赤人望不尽山歌一首并短哥トアル時ハ正明ヲ体トシ後ヲ用トセルヲ長ト短長短ノ遠近ヒアリトテ同シ哥ヲ二首ツラネテ并ハ歌トハ如何ナラン強テハ長短ノ哥二首トハ云ヘシ更ニハ長哥ヲ引トシテ短哥ヲ後ニナセル時ハ誠ニ本朝ニモ引類アリテ足ヲ古今ノ文鑑トナサハ撰者ニ一部ノ眼力アリト称スヘシ況ヤ結文ノ詞ヲ見ルニ云イツキ行ン冨士ノ山ハト次ノ短哥ニ云イカケタル不思議ニ序引ノ両格ヲ兼テ和漢冥合ノ引トエヘシ

手習引　并序　　　東推治

父となりしあふ睍草の二字又名ときこゆれ風雅ならざる
おのこあつまりしそれの手にて其の様をしたらへの新
あくまで手習子もたよりなく終に清きよし京の御用て
よみならんとしれの女の蘭の花なんかはふなくてもまあそぶと
まつもそこらまで籾かくも此手に此蘭の名をあつこ十三家に
四川をふのおいたいやふ又二葉のみやひやすらん
徳つくて咲出て世東のちりひろか

私云此引ハ名ノ説ナレハ語路ニ長短ノ拍子アレハ柱ノ抑竹拔
引ニモ似タラン是ヲモ侍文ニ引ノ体ト立ツヘシ然レハ筆ノムヲ
以テ始ハ其父ノ書遺名ヲ称シ中比ハ其子ノ教訓ヲ加ヘ終ニハ
祝詞ヲ用イタル誠ニ序詞ノ短以间ニメ一篇備ヘタリト云
ヘシ増シテ花鳥ニ詣ヲ寄セテ引ニハ文法ノ風流ヨリ童部
ヲモテナスニ雇實アリ或ハ其句ニ徳トハ蘭ニハ藤徳ノ縁
アリテ其父ノ行儀ヲ云ヘルナラン但シ此蘭ハ木次氏ノ子ニシテ
其比ハ廿年ナリトソ越ノ高田ニ産ス睍草ハ父ノ俳名ナリ

謠類

雨乞ノ謠　　　盤珪和尚

うれしさそこやあをみよふ秋くもあふみへ神かけよ

むかれときくらしけりしへよつてなしもありかれぬかところ

釈云此謡ハ播ナノ人ノ善ク唇傳ヘテ而乞躍ノ唱ヲ為ナリト
去ルハ其ハ世ノ固厄ニテ此和尚ノ道性ヲ蒙ヒテ而乞ノ為特
ヲ韻ヒタラシニ心外無法ノ禅語ヲモ示サス此等ノ俚語ヲ
童部ニ教ヘ給ヘル誠ニ狂言綺語ナリトモ仏乗ノ縁ヲ
結フヘクハ天モナトヤ納受ナカラン直ハ一ハ本来ノ面目ニシテ
其ニハ倒ノ不生ナリト其ノ家ノ人ハ按排スヘケレト実ハ躍
ノ笠ニ蔽テ附テ遊戯自在ノ法ト見テ深ク信シ高ク仰
クヘシ但シ始ニハ播ノ龍門ニ住シ後ニハ天下ニ横行シテ
仏法東漸ノ禅師トハ云ヘリ

石搗謡 并序

坊主仁平

むかし伏羲神農の時にはしめて杵臼のわざをしられ
しより後は此ところのやうにて臣下の上におさまり黄帝
にして大工の作りはしめ鉋一丁にて持ものかち
震旦の時にいたりて人とはなれて庭のやうなるに
かとりもまた申作の時にとりかくしける殷周秦
の世しとなりてかのなるやうに至りて咸陽宮の義
とりてはなれし扇そのかたはらにもなりし金銀珠
も一あたりの所となりしより世々よ大きなるかたちかはらて

世よまなむ人のへかゝるをハあらね舎の金城も又才の人
ありてかのなの大夏にもの名のみ詠まうたゝ今の
世の中をおして持もたれ風雅とえ名ならて世をかくかゝの
往のあらとえをへし為のかゝねんありく者のあらさん
地をひとて秋月の千代をかりなくん本寄をしめのれと
えゝて鑿歌の音も変れあゝあ又信ゝゝれの清此為日
うれしく今われハ不鴝の浮かさまにれゝの子のとも
いさまち仕り

石清水為のあゝんそとくれ餅もふれゝふ
来もぬれうゝれて即も浮らわふらきり

杞云此謡ハ一章七句ニシテ或ハ古楽府ノ体トモ云ハン云レハ
其序ハ虚誕ナヤラ而世ノ要綱ヲ云イナセル文雅ニシテ且ツ
可笑シ況ヤ其謡モ俚諺ナヤラ花ノ二字ニ風雅ヲ添ヘタル
此等ヲ和謡ノ文鑑トセル一ツ也シ此篇ノ趣ハ如皃ノ金城ニ両
度ノ回禄アリテ牧童此技ガ風雅ヲ残セル其句ハ其世ニ
吟行セリトソ或ハ顕下ノ語全仁平ハ例ニ祇師ノ杞名ナリ

辞類

風俗辞 并序

渡部杞

まのあふちりて派しきゝみんをの兼師し林廷辞ともむに
伊とけ書にはおなく此一字の三字あれくしおそらくてこの物語

の音律とさだまるはおなじくこれなりとても宮の音韻
は通ずべからし漢文の辞類には武帝の秋風を始とし
いはゆる六韻一叶のあつかひの中にも詩賦として騒と名の
騒賦して辞とよばれる騒の賦はさもありぬべき辞の賦
はなにがしの諸師の上にあるべし続としは是賦
となる情をいふべし〈なにがし〉漢の文帝のうたひあげん二字は
賦にしてこそよみうる一格ありはた五七の法もあれども時義の式も
なかりけるにはもとより風情をこそ本とは詠じたりけめ
伊勢なれば是なりし漢の帝の秋風も題ありてこそ雄を問へ
語なほ何の格とし詠じてあれとも此をと詠じて捷疋辞

もしられぬかの船よさなるぶ辞にのあはひて捷疋辞の
辞のさまとおもへる也さしいやと文章の気をうけたるもの
まぐの訓解あれども辞賦をうつてその形を詠じて
いはれたる字訓のはなはだし神楽の説文なる捷疋辞とわけて
此二字は詞なりとさまれば辞は心のさまを微情として是や
或は言句のかなりとなることを或は古文辞式の辞は情深して
語辞ありと後の字をとるべしやと文章のかれ手語
とのふべくとして格の外の風雅とまたれとかんかって此事
の名はもかなひて辞の字の訓もまたそれに神楽の辞
なる土佐日記なりし伊勢物語の詞はかひなかりしへて先人この書

の謠也けらし雅頌言のくやしわられやはらかなりなん
さかあるいは三まひ喜しるゐ頌よりしも詩賦一行のかたに
わかしみたしなかるらん彼これと本末の作もて作らり中あ
の辭ともあるべきにも人の國の註ををとりあかられは神なの
文をもまつねよりえをあるみなよ宗の近あんは
訴卿は我詞とせりし頌へ是それにけ給の中立貴王
も郷賛詞の一格あれは實も風俗の辭二章にくわ
これらの風雅なるんやとしれの言葉とわられてけ辭とを
けしげより遠く之平有也の詞をまちつねて近く
は余遠波の辭ともふらんまと

傾城の詞

ましらはりしともこたへんゆへけるえ人ちきあめまし
かりもかつかれし男の作ともあてもんきちめてもへ
うきもはしきもかはるくの命也鮮も作よとね

馬士の詞

坂もてかへし張廉にくりの間の手やらよ酒をあれ
と森のまさしも此峰うつにかれのおかれよ
はやえるされてやこし路の飛ちあえしもちまい

但云此一篇ハ辭類ノ註解ト見ルベシ然ルニ楚辭ト云時ハ
楚国ノ人ノ語音ヲ字セル辭ニシテ只ハ関東ニハベイト云イコンヅト
云イ都ニハサンセ氏アンス氏 助語ハ国々ノ風俗ナリ其レハ此序
モ此辭モ句讀ノ長短ヲ調ヘナルハ詩賦ニ行ノミナラス
此七體ノ外ニ此格ヲモ立テ善ク文類ヲ漏ラサレトナリ
其レハ領城ノ詞ニハワシモヨシモ彼カ平語ナカラ 使ニヒルト云イカラ
蘭ニカルト云ベル側ニ風雅ノ忘ヒケルナリ次ニ馬士ノ詞ニハ銭ノ案ハ
各ヲ彼カ風俗ニシテ十文ヲ十匡ト云イ二十ヲ關ト云ベル竹ノ
一字ハ側ノ風雅ナリ或ハホコレモ通ジ十文ト八サノミナラズ文ト
云フ文ヲホツトツメタルハ助語ニシテ些一字モ遠慮モ宜ニ知ルベシ

山姥ノ辭

一休和尚

そもそも山姥は生所もしらず宿もなしたゞ雲水を
たよりにていたらぬ山の奥もなしされば人間にあらずと
して隔つる雲の身を変へかりに自性を変化し
一念化生の鬼女となりて目前に来れども邪正一如
と見る時は色即是空そのまゝに仏法あれば世法
あり煩悩あれば菩提あり仏あれば衆生あり衆生
あれば山姥もあり柳はみどり花はくれなゐの色々
さて人間にあそぶ事あるときは山賤の樵路にかよふ花

うけやまむかしこゝに肩とりし月もあはれに山をとめて
置まていおくる時もあり又ある時は織姫のいとをくりてする
窓に入て松のうらみをきかせ紡績のかなしみをなせ錦
とき人をまてとかくいさとめし暁の月にうらみを思ひ
とやく人のうらみん世をとられ籟のかなしみを尽しては
垂雲にあらはしの月に押されうらむさむしく人の君します
るも子あはれ方あらはれ姥にあらはれ世の中の山姥を
けるをされや紅にかくて世の中のうき事を絶へとも
いふゆくもこの頻か所のうきをはなすまにあ我の
山姥か山めくりをたえるるまし

注云此題ハ世ニ知レル謡ナカラ例ニ我師ノ論ニ任セテ変ニ辞ノ
一字ヲ加フト云ヒト而モ謡ノ詞ヲ指シテ辞ノ類ト云ニアラス謡ノ
中ニハ此類ノ上ヲナラン去レハ山姥ノ一冊ハ一休和尚作トカヤ
世ニ普ク云イ傳ヘテ古今ニ希有ノ文法ナリト誠ニ忽然
念起ヨリ諸法皆空ノ道ヲ示シ魔仏一如ノ理ヲ顕シ
テ柳ハミトリ花ハ紅ト目前ノ境ヲ云イ尽シタルニ色ト云
字ハ結前生後ノ働キアリテ捌人ノ向ト云文ヲ鎖タル仏理
ニ通セスンハ一体ニアルニモレク文字ニ達セスンハ一体ニアラサラン
況ヤ花ニ体シ月ニ理シト文章ノ手近向ニ鼓舞ヲナセル而モ度
モ開テ感スヘキ段ナリ但シ謡ヲ辞トハ語路ノ長短ニ知ルヘキナリ

艶詞

紫式部

雅云洲のかんなさくてうし絵つり娘もてんたりてうけ
わしおつとされいてらくくしてはくしのいとよそく
こほれかくらせるかとかへるもそくおあかりとせし
くやあるとめてまへかうふつよのふ様も一日もえせそ
まうふぬいつとくろしうろをしはれしおさあしおいる
ちりとちんやまくとふひゆのてまつくねくしくうくるも
人のんやふかしとそひてもうしれきくくしはつく
みをおもるしくえあしてんかへてほうまいかし人のそろと

おつけとそふもせ又かくふありてそふさ由よ人れとふ人
ところそゑしこまらとかくりけのほどへ思そでをまい
くてそもかくりいくへゆの程かさてやそて膝によらり
てねいり給ひやれんいとんかろーうて今年月へゆそそ
あうぬとかくかへへ皆きうてありのあしこそうさて
かきつせらう

狂云此段ハ源氏紅葉賀ノ詞ナルヲ更ニ此題ヲ加ヘテ叟
ハ藤ノ隆房ノ艶詞ノ二字ヲ借レリ去レハ源氏物語ヲ
秋翁ノ文章ノ鑑ナリトセルハ筆ニ縦擒ノ神アリテ人情
ヲ尽シテ又ニ委曲ナラストテ云古文ナレ増シテ此段ハ式部上ノ源氏ニ
思ハレ給ヘル二十帖ノ中ノ骨節ナラン然レハ幼キ人ニ対シ

テ余所ノ恨ヲ負フニシクハ永ク世ニ在リテ添ハントハ幼キヲ
スカセル詞ニモアラス好色淫婬ノ本情ナルニ点頭玉フトハ
本心ナランヤ云レド兎モ角モイフヘ(至ハスト云)所ニ枕草紙ト
源氏トノ浅深ヲモ知ルヘキナリ誠ニ其君ノ膝枕ニ天盤石
ヲ以テ押スカ如ク源氏モニ五カ子給ヘルハ筆力不思議ノ
艶詞ニシテ此間ニ甚深ノ情ヲ汲ムヘシ

戯ル仏ニ辞

烏丸光廣

善福寺にて此佛を見るに一躰手まへして閻浮檀金
の鋳像なり多田新発意満仲の御仏とや
おはしくみ藤のさかりなるやしろに南無阿弥陀
仏を十郎なとゝ云ふ人を見るにおほく比て
此のかしこあるしをそれ善光寺田舎の像と申け
極楽にて悪人をも導く法縁なるらんと思ひて
さうなしとて有馬山の夕霧をわけて見れは彼
東の道にてあらかしてまいれ
猪名野の笹原をわけてきて山からは
出て明神とおもひしかはませらん
まことに結縁の縁も深しとさて浄土往生
と思ひしより申す事なく

往云此篇ハ光広卿ノ有馬ニ入湯ノ時ノ筆トカ云ヘル
行次ニ書續テ見ル所ノ語モ有ルヘキカ然ルニ此篇ノ題名ハ
結文ニ綺語ノ二字ヲ見ルヲ此二字ヲ以テ題セシカ中間
ノ首ヲ辞ト見レハ今モ古文ノ漁父辞ニ似テ前後ニ
序詞ノ文勢アレハ此等ハ漢家ノ辞トモ云ハン但シ此卿ハ
和哥ノ家ナカラ此等ノ字格ニモ遊ヒ玉ヘル誠ニ文法ニ
疎カラリ雁宿ハ自在トハ称スヘシ

悼捨子ノ辞

芭蕉庵

駿河の国に入てふし川のほとりを行に三つはかりなる捨子の
あはれけに泣あり　いさや此川のはや瀬にかけてうき世
の波をしのくにたへす露はかりの命待まと
捨置けむ小萩かもとの秋の風こよひやちるらん
あすやしほれんと袂より喰物なけてとをるに
　猿を聞人捨子に秋の風いかに
いかにそや汝父に悪まれたる歟母にうとまれたる
か父は汝を悪むにあらし母は汝をうとむにあらし
唯これ天にして汝か性のつたなきをなけ

往云此辞モ漁父ノ文勢ナカラ捨子ニ秋ノ風イカニト
向カケテ如何ニソヤト序詞ニツヽケタル但シ辞韻ノ一体ニシテ

倭文ニ辞ヲ立ル時ハ千般ノ法格アルヘシ誠ヤ富士川ノ瀬ヲハヤミ浮世ノ波ニイヤヒタル此川ナラテハ更ニ知ルニシトニ秋カ露路ハ涙氏ノ言ヲ借リ父母ノ情愛ハ荘子カ天性ヲ云ヘル例ニ和漢ノ博達ニシテ是ヲモ漢家ノ辞ヨリ倭文ノ助語ヲ用得タリトスヘシ

夕暮ノ辞 并序

東花坊

むかし誰あり湖東の人と逢ふるとて武江に世を行のおとおしめるを東むも帰るにしくありて此別をおくるははかなんや誰よ行の人にいくよ行て行のこゝろを詩師ありけれはこそむかしより遠きむかしありて廣土ありしを春あり

て詞をとりて送る人とまもひ賊をとりて送る人といやしむ行の者をやさ行かてふ人あるやけりもて行の詞の也まをこゝあるを賊そある人のあるもけるてあれはあかしむかしより旅にあるふ人に一銭の備とうやゝて工商の旅へ妻子をかゝへら言に禄の人ト家名をそなしまて世にあるて行の旅よあるらんあるいはそいわれてあるいはのし春秋もうつくしてむへつまふると武士の旅よ引付もけりより今出りまちむ軍よ立所ハ多ならやかゝしゆる所の命をもおしむれとかのれかゝりときよう皆旅よして旅をこゝろさしる人を急に梅流園のあくしい

おほやけのつミにあつかりて武陵一万里の旅におもむきし
その昔はこれよりやはじまりけん しかるにおしはかるも
あはれなるべし けふのなかばは秋のこよひの月と思へば
またこの里のかれ故人のいかもかのこ笠山の月にもおもひやらん
まして都路の関を越ゆれば故人ならんやのんきなり
けふ人をかけて梅の弟子となりて東花坊が門人となりしと
またその支梅の説によりて梅のむめを名とせり いつはりならぬ
支梅の江南より渡り来りて風雅にも酸の味をまねて
馬祖道一の蓑笠をとりて尽の人へこそ けふの発
として此年語ることやかたらんと梅に依閑上人の跡と

あけてきく此夕暮をおもしろのこと
鴨たつ川やかの西行の旅人を世とてかゝる此名残らしと。
それまでのてあふ沢のむしもみるはあつそうた。
趣のうちて此駒へ一けふふる暮をとさきれまつやたよ。
註云此辞八十三句アリテ鴨立ノ句ハ発語ナレハ八十二句ニシテ
六韻ナルヘキニ是ハ二句合セテ一句ノ意ナル故ニ六句ニシテ二韻
ナリ是ラモ叶韻ノ一格トミルヘシ其レハ其ニ序ハ老子ノ詞ヨリ
中ヒハ毛詩ノ三秋ヲ摘シテ和ニ仲麿カ昔ヲ寄セ漢ニハ
王維カ詩ヲ合ハス梅子ハ傳灯ノ故事ニシテ師弟ノ称名
ニヤ徳ニハ西行ノ東(アヅマ)下リニハアラヌテ定家卿ノ山屋ノ佗(ワビ)

シカレハ去ニル本ヨリ三夕ノ暮ノ詞ヲ含メテ僧俗ノ貧富ヲ旅ニ題ハセル誠ニ文章ノ奇法ト称スヘシ然レハ此答篇ノ辞ニハ似セテ漢文式ヲ守リテ別ニ俳文ノ一体ヲ立タル法ニ私ナキ證ニ文ナラン但シ此序ニ湖東ノ人トハ五老井ノ許六ニシテ其時ノ三參紫竹ノ辞ト題シテ彼カ文選ノ巻頭ニ置キヌ去レト辞ト題セシハ別ニ筆格モアランカト此辞ニ附テ論アレハ爰ニ此答篇ヲ出セルナリ

鳥追辞

作者不知

やんらめでたやよい所や一万町の鳥追ひまつりて禍の神といふものをも厭ひ給へ〳〵ひの村〳〵給へ〳〵ひの大臣門より給へ

佐藤殿の御内にはさふらひ衆やら左大将右大将関白殿下なりおひろきあのもの追ひ給へ宮のふよせにをや御へ西田も下よ所も田よ所あり〳〵八よ所の鳩まで中の殿のよきさぶらひと寿年さきあの鳥代あるとおやらさておくり田をそれ〳〵かりてる子にて日暮まで迄ま子に嫡子さまふね所の事よまよ来りりとかね所の事まで一万米いりと篇毛ある駒に任けやかりにて雌羽ても去いうう雄羽ても去いうりあそのよまう太あうし蹄さうふあり蹄うり每年の稲ままさ若い稼とも伺ふとよ田歌のさうさ治そまそでうなしの馬まで治がてまいて

角にそよ追ふてそあれ田の稗刈かへてやりけるよ萬代よし此の孫もよし此の世より千年万年と祝ひつゝて先より西に夕日を待ちて帰る道とれて一年からく暮るゝてまたおれば十月山さと二月待春の月と九月と此ふて此月とて部月と殺ちてむすめとや小女郎さらはらさらくやむや伊氏の祝ひとて千年の世いはふ

往云此章ハ正月ノ祝詞ニシテ鳥追ト云者ノ農民門々ヲ立イカリク唱哥ナリ其者ハ習シ説経者ト云テ逢坂ニ蟬丸ノ流ヲ汲テ三井ノ近松院ヲ本寺トセリト今佐多羅トモ云者ナラン然ルニ此一篇ノ分明ナラス卑凡ノ者ノ習ヒ傳ヘテ

鳥丸ノ語ニハアラテ世ニ云フ武蔵坊弁慶ヲシヘボベント句読セル如ク口授ノ違イ多カラン歟レト此等ノ文章ヲ以思九向ニシテ定ムル一キニモ非ス不々ニ其文ヲ中略シテ法格ノ外ノ風雅ヲ知レトナリ去ルハ五七ノ語路モナク假名負名ノ配モナク二句長短ノ拍子モナキニ絶ニ風雅ノ情ヲ見テ此等ヲ辞ノ文鑑トセハ文章ノ家ノ活計ナランナリ去氏此式ノ様子庭ニモアルハニヤ一聴冈所ノ俳諧ニ及ヒ中牧ハ井田ノ法ヲ云ヘル但シハ延喜上ノ淳朴ニシテ上古ノ作文トハ見ルヘタリ然ルヲ結語ノ妊婦ヨリ不意ニ俳法ノ二字ヲ云ヘル妊婦ハ門々ノ祝詞ニテ俳法ハ彼カ常語ナリト見ルヘシ

箴類

閑居ノ箴　芭蕉庵

あら物くさの翁や日比ハ人のとひ来るもうるさく人にもまみえし人をもまねかしとあまたゝひ心ニちかふなれと月の夜雪のあしたのみ友のしたはるゝもわりなしや物をもいはすひとり酒のみて心にとひ心にかたる庵の戸おしあけて雪をなかめ又ハ盃をとりて筆をそめ筆をすつあら物くるほしの翁や

酒のめはいとゝ寝られぬ夜の雪

任云此題ハ大学ノ辞ヲ借テ閑ハ閑ナリ小人ノ独処ナリト朱氏カ註ニモ云ヘリトワキマヘシハ此箴ハ隠者ノ常情ニシテ或時ハ世ヲ疎ンシ或日ハ人ヲ懐シム本ヨリ心神不定ナランハ鏡阿モ風月ノ情ニ過タリトテ兼好法師ノ箴タル使ナラン誠ニ此箴ハ前後ニ翁ノ字ヲ用イテ自己ノ散乱ヲ箴タル首尾ノ文法ヲ見ルヘキナリ但シ此句ハ坊子ノ発句トモ云フ(キヤト談ス)羽モ語リ玉ヘリトワ常ニ我師ヘシ古人ヲ云ヘリ

猫恋箴　支巴静

猫よくむらしたすこの言は懐子くらきよねハ清少納言

さえ猫にもあかされて命婦のおとゝあるかくよまはゆる

羅綾の膝にもあそびし小まふ女猫といひ袖にみそふ
宮の御かたにありし月ねの坊ねぶりしおひ
ころん忍る人目をしのびしかはて今さらにつらう
うつれわらむ野等猫のうきなをかしこらね
たてまつりし今やうの絵羽掛にもかきらあるは毎に織
の色にかへて猫又の山のおくにかよひてしるれ敵に
ましひそかに世をしのびし此又しふみしあはれ
なるこゑねあるさまの女に似たりて用捨なき
又鬼家ゆかんやしなひ二疋猫とありて家内の
隣の女にはつるふかれりなんきとて女のわれの

り来とよばさるなかん忘れしと有情の色にまよひつる猫は
一ねまもえいやしとえへて人を二世までもかこちつらんに
いはく人とりて猫ならにあらはれんと縁をもて佛をとげ
むらに仏の縁とあやしむるんもきらを訳らて仏を傳え
とらしめさもよしあきらふくしをまよらされてけるかなんるハ

評云　此篇ハ自利利他ニシテ詞ヲ寄スルニ潭雅ナリ蓋シ
ハ源氏ノ風流ヨリ梵草紙ノ寓言ヲ合セ或ハ徒然草ノ
古語ヲ借テ稲荷ノ山ノ古言ヲ採ル狐ト猫トノ二尖ハリ
ヲ云イテ又ト云字ノ徒名(アダナ)ヲ童子タル文筆ノ自在ハ
此篇ニ見ルベシ然ルヲ孔子ノ一語ヨリ人ノ色欲ノ猫ヨリ

毛浅間敷ハ遠ク歳テ近ク慎サランヤ然リ色ニハ遊ヘクテ
色ニ溺ラヘカラストハ肉雖ノ言モ此意ナルヘシ但シ巴静ハ太田
氏ニシテ尾ノ城下ニ假居ス書生ハ濃ノ竹ヶ鼻ノ産ナリ トワ